

書評

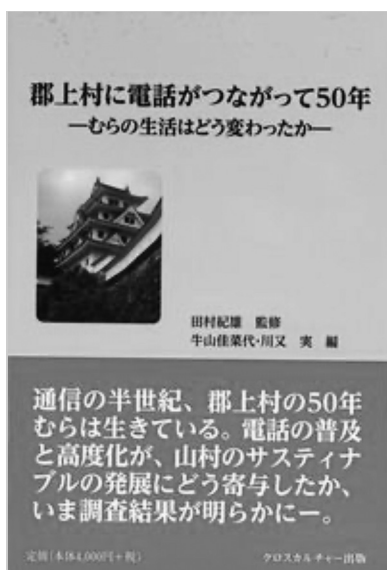
田村紀雄 監修，牛山佳菜代・川又実 編（2024）：  
『郡上村に電話がつながって50年  
——村の生活はどう変わったか——』

クロスカルチャー出版，2024年

山田晴通

1934年生まれで90歳の卒寿を迎えられた田村紀雄先生は、本学名誉教授、コミュニケーション学部初代学部長であり、本来なら敬称付きで言及して然るべきなのだが、書評という文章の性格上、以下では敬称を省いて言及することをお許しいただきたい。

本稿を執筆している2024年10月の時点で、CiNiiのヒット数が、論文476件、本115件などという、人文・社会系研究者としては膨大な量に上る田村の研究業績は、地域メディア関連、日系新聞関連、田中正造などと多岐にわたる領域に及んでいるが、とりわけ、電話を中心としたテレコミュニケーションの革新と、その社会的影響に関する多様な論考は、田村の研究履歴におけるひとつの大きな流れとなっている。その中でも、特に注目された取り組



320 ページ，4,400 円（税込）

みが、1972年から2019年にかけて、7次にわたり同一のフィールド（研究対象地）において重ねられた「郡上村調査」である。ここでいう「郡上村」とは、現在は岐阜県郡上市の一部になっている、山あいに位置する、戸数70戸あまりの集落である。「郡上村」は、リンド夫妻の「ミドルタウン」と同様に、一連の調査を通して用いられたコード、集落の実名を伏せるための仮称である。個々の調査の成果に関する報告は、既に様々な形で世に問われているが、本書はそうした既発表の内容を単純に編集したものではない。本書に収められているのは、一連の調査に参加した研究者たちが、半世紀に及ぶ「郡上村」調査の成果を、それぞれの視点で通時的に振り返り、一定の総括をおこない、さらには新たな問題を提起するといった趣旨から綴られている論考であり、あるいは考察への補助線となるようなコラムである。

7次にわたる「郡上村調査」の契機となったのは、1973年に、それまで（集落内を対象とした有線電話は存在したものの）電電公社の電話回線がほとんど引かれていない「無電話村」だった「郡上村」に、一挙に公社電話が引かれたことであった。事前に、当時の電電公社の責任者からこの情報を得た田村は、公社側の協力を得て、公社電話導入前の1972年に第1次調査を、導入後の1973年に第2次調査をおこない「電話の普及が、農山村生活にどのような影響をもたらすか」という課題に取り組み始めた。当時の田村は、東京経済大学への着任（1974年）直前で、桃山学院大学社会学部助教授、まだ30代の精力的な研究者であった。

この調査の大きな特徴のひとつは、当初から、各戸の主婦（その多くは専業主婦）を主たる調査対象と定め、悉皆調査を指向したという点にあった。小さなムラにおける社会関係を把握していく上で、少なからず他地域から嫁入りしてきた他所者としての背景をもつ主婦たちが、どのような社会的ネットワークを築いてムラに定着しているのか、そこにメディアの変化がどのように関わるのか、といった関心が、当初から調査の背景にあった。

一連の調査のうち、最初の2回の調査の報告は、「桃山学院大学田村ゼミ」名義の冊子として出されており、現在では入手が困難だが、その成果は、田村（1977）に生かされている。以降、第3次（1993年）、第4次（2001年）、第5次（2009年）と、内容を更新しながら質問紙調査が重ねられた。さらに、調査手法を大きく変更し、少数者を対象とした生活史のインタビュー調査が第6次調査（2010年）として実施され、さらに再び悉皆調査を目指す質問紙調査に戻る形で第7次調査（2019年）がおこなわれた。第3次調査の成果は、本学の紀要である『東京経学会誌』（田村ほか、1994）、第4次以降の調査の成果は本誌『コミュニケーション科学』に公表されてきた（田村ほか、2002：2011：2015：2021）。

本書は、こうした成果の積み上げの先で、一連の調査に（それぞれ部分的にはあれ）参加した研究者たちが、回顧的、反省的に成果の意義を再検討したものである。本書の目次から、章題と執筆者を記しておく以下のようなになる。

はじめに 通信の半世紀、郡上村の50年、そして研究者の50歳 (田村紀雄)

I. 郡上村という「地域」

第1章 「むらコミュニティ」を考える方法 (田村紀雄)

第2章 郡上村からの地域自立へのシナリオ (上田裕)

第3章 郡上村が集落としての機能を維持している要因—限界集落論を手がかりに (牛山佳菜代)

【コラム】地域社会はどのように把握されるべきか? (岩佐淳一)

II. 郡上村とメディア

第4章 電信・電話、テレコムへの希求—郡上村とメディアの史的考察 (吉田則昭)

第5章 郡上村のオピニオンリーダーとコミュニケーション・メディア (川又実)

【コラム】うなぎ伝説 (安藤明之)

III. フィールドとしての郡上村

第6章 フィールドとしての「郡上村」: 初期ブルデューの農山村調査を手がかりに (山崎隆広)

第7章 域外との接触の多様化と域内の有力者に関する意識の変容 (吉田文彦)

第8章 郡上村主婦の購買行動 (齋藤聖一)

【コラム】「郡上村元年」の頃 (高橋順)

資料編 郡上村調査の五〇年

1 郡上村における電気通信メディア利用の変化と特徴—質問紙調査を中心に (牛山佳菜代)

2 郡上村における生活の変化と展望—インタビュー調査を中心に (川又実)

【コラム】テレコム化と中国農村の電話「郡上村元年」の頃 (陳立新)

おわりに (牛山佳菜代, 川又実)

以上のように、本書には、3つの部分と資料編から成っているが、資料編とされる2本の記事も論文と見なせる内容であり、都合10本の論文と、4件のコラムが収録されている。これらの論文は、独立して読み解くことができるものとなっており、監修者である田村による「はじめに」と、編者ふたりによる「おわりに」を先に読んでおけば、あとはどのような順で読んでいっても差し支えないかと思う。

ただし、本書は、冒頭からこの目次の順で読んでいこうとすると、特に従前の調査の経緯や、既発表の報告に触れていない読者には、ちょっと分かりにくい構成になっているようにも思われる。これまで「郡上村調査」にあまり触れてこなかった読者には、まず、編者ふたりによって記された、資料編の2本を先に読んで、前提となる調査の概要を把握してから、他の章へ向かうことを勧めておきたい。この2本の記述の概要が先に頭に入っていれば、他

の章の理解は大きく進むことだろう。

資料編を通読した上で、田村による第1章を読むと、調査全体を通した、田村ら調査関係者たちの問題意識の所在が見えてくる。もし、村落のサステナビリティとか、限界集落論などといった議論に強い関心があれば、そのまま第2章、第3章と読み進めても良いのだが、メディア論への関心がある向きには、あえて次に第4章以下のII部を先に読むことを勧めたい。吉田則昭による第4章は、「郡上村調査」の開始に先んじる時期における「郡上村」のメディア環境の歴史を、江戸時代から書き起こして辿っていく。これは、調査の前提となる地域の事情を歴史的な文脈の中で捉える試みであり、他の論考へひとつの視座を与えるものとなっている。続く、川又による第5章は、あるいは、吉田文彦によるIII部の第7章を先に読んでから、読み解いた方が分かりやすいかもしれない。第7章は、いろいろ制約がある中で、計量的に捉えた「域内有力者」への意識の分散化という結果を提示する議論であり、第5章は、古典的なオピニオン・リーダー論の批判的な検討を、「郡上村」の文脈を踏まえておこなったものである。

III部の最初に置かれた、山崎による第6章は、「郡上村調査」の経験を、初期のブルデューによる農山村調査に基づく考察と重ね合わせながら、実験室としての「郡上村」における今後の課題について踏み込んで論じている。「郡上村」のような農山村における、独身男性の「結婚戦略」という議論は避けて通れない問題である。この章は、本書の中でも、今度への展望を最も明確に語っている論述である。

齋藤による第8章は、わずか10ページの短いノートであるが、第7次調査の成果を中心に、「郡上村」の主婦たちの日常的な購買行動を素描した報告であり、モータリゼーションやEコマースの浸透がもたらすリアルな姿が読み取れる。

以上を経た上で、I部の残された2本を読むと、「郡上村」の事例を、限界集落論へのひとつのアンチテーゼとして提起しようという試みが浮かび上がってくる。上田による第2章は、客観的なデータとしての人口構成の変化などから説き起こし、交通や通信の発達が開かれたコミュニティへの展望を示すことを論じている。続く、牛山による第3章は限界集落論の批判的検討から入り、インタビュー調査のデータを用いたテキストマイニングによって、「誇りの空洞化」を生じさせていない「郡上村」の姿を示している。

長期間にわたってひとつの小集落に入り、継続的に調査を重ねて、ムラの生活実態の変化を捉えていこうとする試みは、農村社会学や農村地理学などの分野では、さほど珍しいことではない。しかし、半世紀にわたり、テレコム分野の著しい技術革新を背景として行われた一連の「郡上村調査」は、他に類例を見ない貴重な取り組みであった、と現時点で一応の総括が可能であろう。ここまで調査を牽引してきた田村の年齢を考えれば、従前通りの体制での調査の継続は、今後は難しいのかもしれない。しかし、一連の調査の意義のひとつは、田

村たち、今ではシニアとなった年長の研究者たちが、調査活動を通して、その子どもたちよりもさらに若い世代の研究者たちを育てていったという点にもあるだろう。その意味では、「実験室」としての「郡上村」を対象とした「郡上村調査」は、今後も何らかの形で、変容を遂げながらも継続され、新たな考察を生み出していくのかもしれない。

かつて社会学におけるシカゴ学派を主導したロバート・E・パークらは、米国シカゴという大都市を「実験室」として、豊富な内容のモノグラフを生み出した。また、社会調査者である以前に社会改良家であったシーボーム・ラウントリーは、英国ヨークで1899年、1935年、1951年と、半世紀にわたり3次にわたる貧困調査をおこない、社会の変化を活写し、貧困の克服に貢献した。こうした古典的な先例に比べれば、「郡上村調査」の規模は、対象者数において3桁から4桁も桁が違う、ささやかなものである。それでも、田村のリーダーシップの下で、様々な世代の研究者がチームを組み、半世紀にわたって継続的に特定のフィールドを見つめ続けた成果は、この間の日本社会の変化を、その一断面において的確に捉えたものであったと評価できる。

「郡上村調査」が始まった1970年代は、「wired city」、「wired society」といった概念が、未来の可能性として盛んに論じられていた。アルビン・トフラーのように一世を風靡する論客も登場し、情報化の進展によって在宅勤務が可能になり、人口の分散化が起こるといった「electronic cottage」などの可能性も取り沙汰された。こうした半世紀前における近未来の夢は、移動体通信とインターネットの急速な普及、さらに物流システムの再編によって、多くが実現し、今われわれはその先の様々な課題に直面している。

「郡上村」が限界集落化することなく存続してきた背景に、テレコムの普及を含む通信や交通への積極的対応の伝統があるとする見方には、説得力がある。しかし、具体的にどのような経路による、どのような情報の交流が、非都市地域の生活者の社会活動を支え、ひいては地域社会を支えるのかという観点からの議論は、まだまだ抽象論に偏っているのではないだろうか。「郡上村調査」に限らず、具体的な地域の体験、生活者のリアルを追求していくフィールドワークの取り組みは、例えば近未来に向けた農山村の振興政策を考える上でも、具体的なファクトに基づく様々な示唆を生み出すことにつながる豊かな可能性をもっている。本書は、そのことを再確認させてくれる。

なお最後に、上で述べた章構成への苦言とは別に、少し辛口なことも述べておく。本書には、何らかの推敲不足、ないし、校正ミスと思しき、意味が鮮明でない文章が散見される。これは特定の章に限ったことではない。「玉に瑕」といったところであるが、編集作業の段階で、もう少し頑張ってもらえれば、なお良かったのではないかと思った、というのが、正直なところである。

参 考 文 献

- 田村紀雄 (1977) : 『コミュニティ・キャンペーン 電電公社の地域活動記録』サイマル出版会, 232ps.
- 田村紀雄, 吉田文彦, 上田裕, 榎彦左エ門 (1994) : 郡上村電話化の20年—無電話村に何が起きたか—, 東京経学会誌, 189, pp.51-83.
- 田村紀雄, 池宮正才, 櫻井猛, 染谷薫, タン・イチ, 杜紅, 陳立新, 山田奈々江, 桜町敏, 上田裕, 吉田文彦, 吉井博明 (2002) : 「郡上村」のコミュニケーション生活—「電話化から30年 第4次調査報告」—, コミュニケーション科学, 16, pp.101-145.
- 田村紀雄, 安藤明之, 上田裕, 山崎隆広, 牛山佳菜代, 川又実 (2011) : 第6次「郡上村」調査とむらびとの個人史, コミュニケーション科学, 34, pp.25-45.
- 田村紀雄, 上田裕, 山崎隆広, 牛山佳菜代, 川又実 (2015) : 「郡上村」の窓から異世界を俯瞰する—むらの社会・文化は《変化》を止めない—, コミュニケーション科学, 41, pp.115-132.
- 田村紀雄, 上田裕, 吉田則昭, 山崎隆広, 川又実, 齋藤聖一, 牛山佳菜代, 山中雅大 (2021) : 第7次「郡上村」調査からみる農山村と地域コミュニケーション, コミュニケーション科学, 53, pp.203-241.